

## 副主任コラム 12月号

副主任 澤井 良子

段々と秋から冬へと季節が移り変わり、寒さが増してきました。

10月末からの午後の園庭でのことをお話したいと思います。年長児の女の子2人が身体を丸めたりしながらお互いの身体を跳びあって遊んでいました。何故急に馬跳びが始まったのだろうか?と思いながら、少し離れた所から私は見ることにしました。すると、2人に「先生、ちょっときて」と言われ「これやって」と馬跳びの馬になるように言われました。『こう?』と言われるがままにダンゴムシのポーズ（避難訓練の時にする）をやってみました。「そう、これ」と言って2人は跳び始めると、初めは低かったのに「先生、どこまでが1番高いの?」と言い、私は自分の足首をもって高くすると「こんな高いの無理」と自分で挑戦できる高さ、確実に跳べる高さを伝えるようになりました。午後のおやつまで跳び続けると、「あ～楽しかった。また明日もやりたい」とお部屋に戻って行きました。また次の日も同じように「やって」と言いに来たので私は馬になりました。前回は年長児だけの時間でしたが、今度は3歳児から5歳児までいます。昨日の2人の姿を見て、やりたい子達がやってきました。すぐにできる子、やってみたらうまく跳べなかった子、ずっと見ている子と様々です。そこで年中の女の子がやってきて2・3回跳ぶと近くにいた保育士の手を握ってこちらを見ながら泣いてました。『どうしたの?』と聞くと「できないことが悔しい」と保育士に伝えていました。『なら先生、跳べそうな高さにするし、失敗して足が当たってもいいから一緒にやろう』と声を掛けると、泣き止んでまた挑戦し、手を握ってくれた保育士や、できるお友達に「こうしたらいいよ」と言われながら何度も跳んでいるうちにできるようになりました。自信がついたのか、今度は泣いてた女の子が馬になったりして、違う子に教えていました。それを、また3歳児の男の子が様子をじっと見ていました。私はこの3歳の男の子がどのタイミングで参加するのか楽しみに見ていました。最初に馬跳びをやった年長の女の子に『なんで、この遊びが始まったの?』聞くと「絵本コーナーにあった本に載ってたからできるかな?って思ったの」と、きっかけを話してくれました。

絵本コーナー（環境）から、子ども達がやりたいと選び（選択）つまりいた時に大人に求める（人的環境）自分がどこまでならできるか?（高い低い、見る参加などの自己決定）そして子どもから子どもへの広がり、最初は2人から始まった事なのにこんなに色々な子との関わりや心の葛藤が見えて、集団の中で子ども同士の育ちはすごいなと感じました。泣いて悔しがった女の子も、やりたいことをうまくできない自分との心の葛藤、また集団のなかにいるからこそ芽生えた感情・体験なのではないかと感じました。そして今度は教える立場になる。そんな心の育ちや学びを保育園生活の中でたくさん経験して行って欲しいと私は思います。

今やっている選択制や見守る保育は、小学校から一斉になった時まで、自分で選ぶ・やりたいことに集中する力をつけるということも含まれています。しかし、やりたいことばかりでなく、他のことに挑戦することもできるように視野を広げてあげることも大切にしたいと思いながら、日々子ども達をみている先生達と共に保育し、子ども達と関わっていきたいと思っています。